



吹田市

文化財ニュース

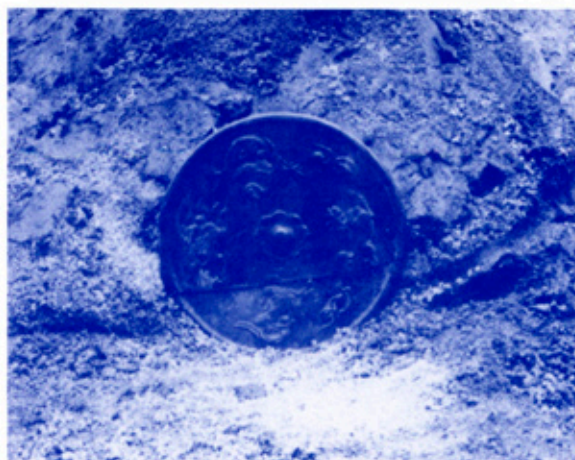
No. 8

昭和62年3月31日

〒564 吹田市泉町1丁目3番40号

吹田市教育委員会

TEL (06)384-1231



▲五反島遺跡、平安時代の宮廷祭祀に使用されたと考えられる中国鏡の出土状況

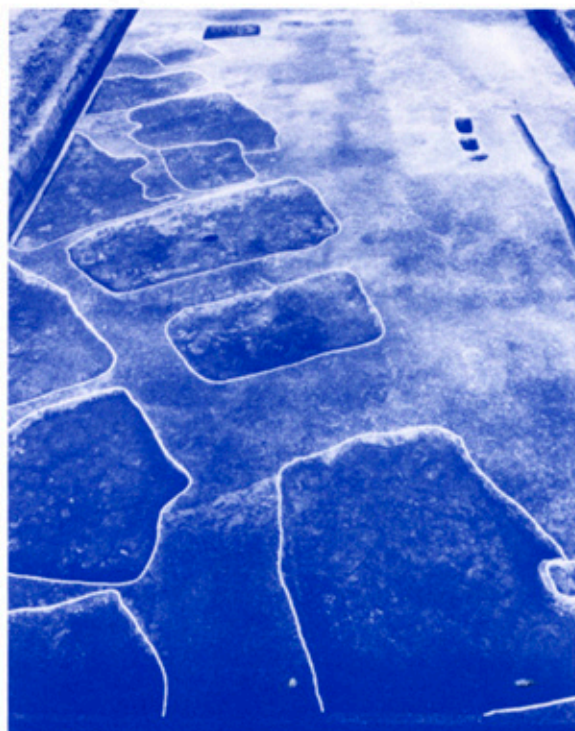
昭和61年度 文化財保存事業の成果

埋蔵文化財発掘調査事業としては、昭和61年7月から昭和62年1月にかけて、南吹田下水処理場の拡張にともなって、五反島遺跡の8,500㎡に及ぶ、大規模な発掘調査を実施しました。

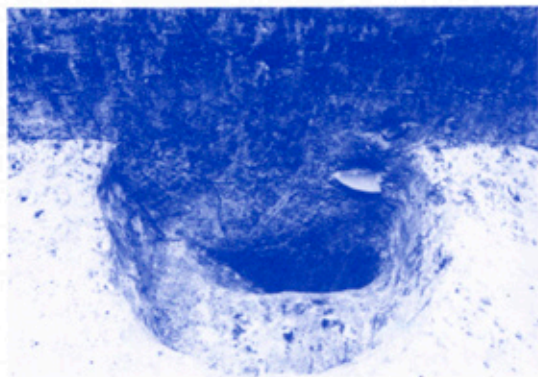
この調査では古墳時代から平安・鎌倉時代の河道や堤防を検出するとともに、宮廷祭祀に使用されたと考えられる中国鏡、鉄鏡をはじめ、多量の遺物が出土しました。また、昭和62年1月から3月にかけて、史跡吉志部瓦窯跡の周辺地において2件の発掘調査を実施しました。この調査では瓦窯に関連する轆轤（ロクロ）ピットや粘土採掘坑と考えられる遺構が確認されました。

吉志部瓦窯跡では瓦窯以外の工房関連遺構の検出は初めてであり、今後の調査が期待されます。

文化的遺産の保存事業としては市内5自治会（金田町・神境町・都呂須・西奥町・六地藏）の所有する地車と、長野東にある似禪寺の襖絵の保存修理を実施しました。

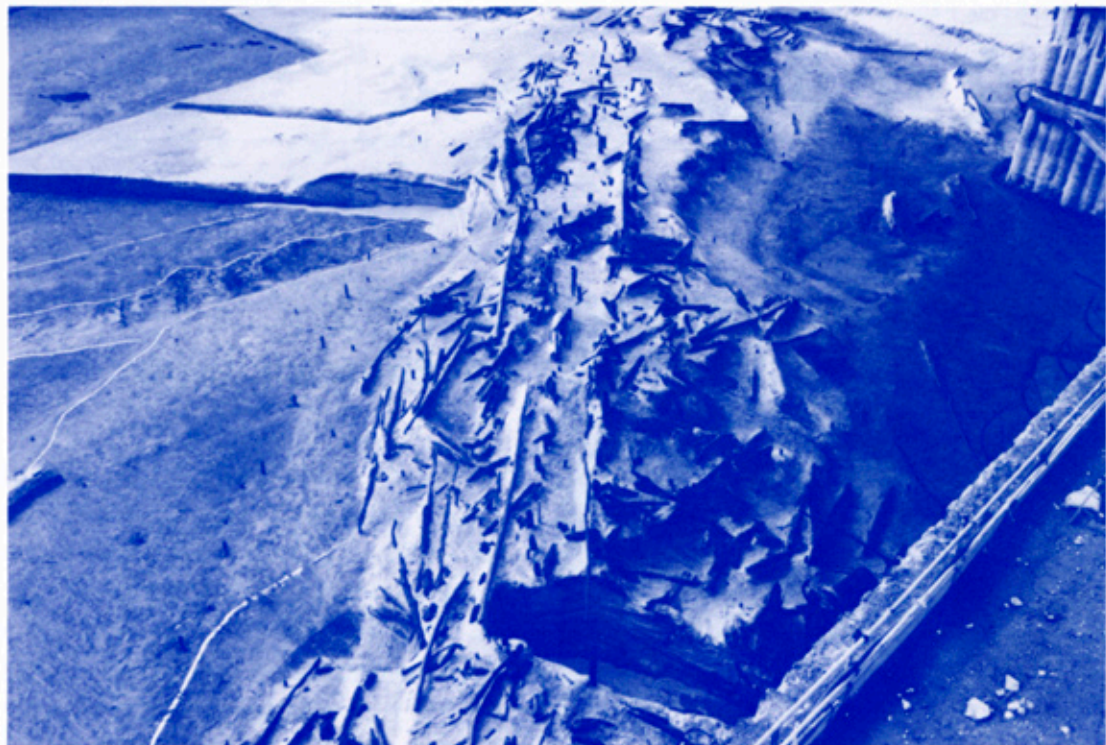


▲吉志部瓦窯跡粘土採掘坑



▲吉志部瓦窯跡轆轤ピット

掘り出された古代の川と堤防



▲五反島遺跡で発掘調査された平安時代の堤防

五反島遺跡は神崎川北岸 0.2kmの吹田市南吹田 5 丁目 4356 に位置し、昭和42年の南吹田下水処理場の建設工事に際して、地元の研究者である宮本照男氏によって発見されました。

地下3～5mの地点から、弥生時代から中世にかけての遺物が出土することが確認されましたが、このように遺跡は地下深くに埋没していることから、その実態については明らかではあ

りませんでした。しかし、最近の市内の下水道整備の進捗に伴って南吹田下水処理場の拡張が計画されたことから、遺跡の詳細な状況を確認することが必要となりました。昭和59・60年度にかけて拡張予定地の試掘調査を行い、その結果をうけて拡張部分 8,500㎡について発掘調査を行いました。調査は昭和61年7月から昭和62年1月にかけての7ヶ月の長期間に及び、出土遺物も約10万点に達するという、吹田市において最も大規模な調査となりました。

発掘調査では、調査地点が神崎川の旧河床であったことから、調査区全域で東から西へ走行する古墳時代から平安・鎌倉時代の7条の旧河道や、平安時代の堤防を検出しました。出土した多量の遺物は弥生時代から鎌倉時代にかけてのものですが、特に古墳時代と平安時代のものがまとまって出土しました。中でも、平安時代に使用されたと考えられる中国鏡（瑞花双鳳麒麟狻猊文鏡）、鉄鎌、刀子、馬具（壺鈴）、竈等が特に注目されますが、質的にも量的にも優れたものが多く、一部は宮廷に関連する祭祀に

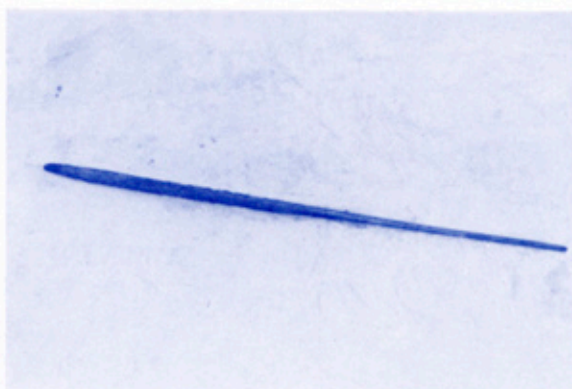


▲出土した馬具(壺鈴：足をかける部分)

使用されたことが考えられます。

さて、今回検出された河道跡（河道1～7）の内、出土遺物や検出状況から河道5は古墳時代、河道1～4・7は平安～鎌倉時代、河道6は鎌倉時代以降に形成されたものと考えられます。これらの河道跡は神崎川の旧河道であり、河道1～4についてみると、時期が下るにつれて南へ流路が移っていくとともに河床面が低くなり、現在の神崎川に近づいてきます。

神崎川は古くは三国川と呼ばれ、淀川とは独立した水系で、その名のとおり山城・丹波・摂津の三国の境にその源を發し、茨木市安威の付近で安威川と合流して、吹田を経て尼崎から大阪湾に注いでいましたが、史料によると、延暦4年(785)に神崎川と淀川を直接結ぶ工事が行われたことが記されています。これは主に淀川下流域の水害を防ぐためと、前年に開始された長岡京の造営に関連して、西国からの物資の運搬の便を図るためという2つの理由が考えられます。特に、淀川と直結したことで、西国から長岡京や平安京へ向かう水上交通路として大きな意味を持つようになります。今回の調査で、平安時代前半から遺物の出土量が増えるとともに、瀬戸内以西の地域で作られた土器が認められることもその状況を反映しているものと考えられます。また、この頃、遺物の内容が質的に高くなるのも、当地一帯が直接京都と結ばれたこと

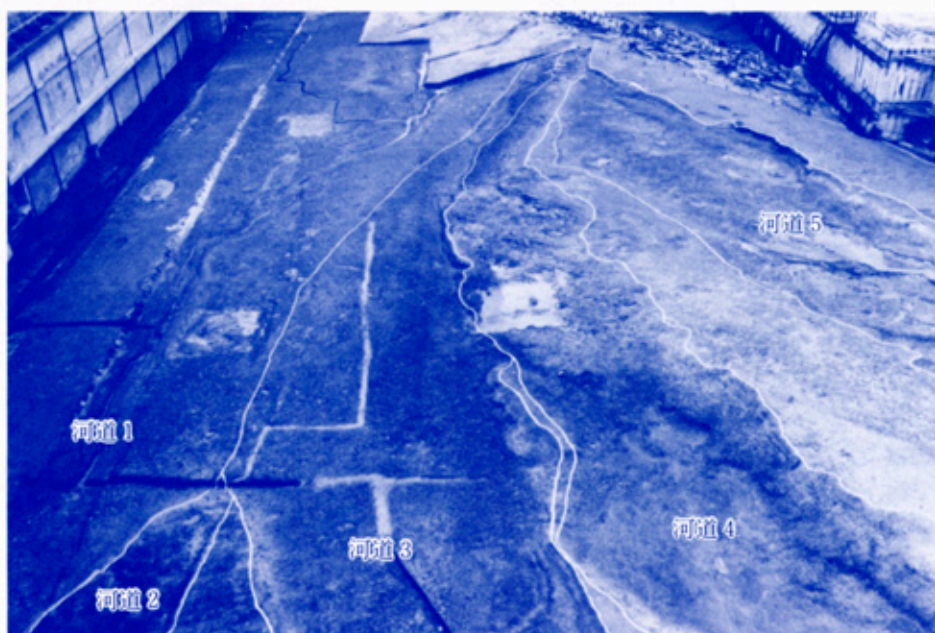


▲出土した櫂(かい) (長さ3.5m)

により重要性を増したことがうかがえます。

この神崎川には北の千里丘陵から、糸田川、高川、天竺川等の小河川が沖積平野を横切って流れ込んでいますが、特に糸田川は丘陵部から平野部に向けて10m以上の比高差があるために激しい流水となって流れ出し、中世における河道の固定化がなされるまでは、洪水等によって川沿いの集落に大きな被害を与えていたことは垂水南遺跡の発掘調査において確認されています。そして、これらの小河川は激しい勢いで、神崎川本流に濁流となって流れ込むために、一帯に水害を引き起こしたり、船の往来を非常に困難なものにしたことが考えられます。従って、双方の流れをうまく調整する必要が生じてくる訳ですが、今回、調査された堤防がその機能を

▶発掘調査された神崎川の旧河道跡





◀平安時代の堤防は延長60メートルにわたって調査されました。又、その一部は樹脂加工して、永久保存を図り、将来建設される資料館で公開展示する予定です。

果していたと考えられます。堤防は、ほぼ東から西に向かってまっすぐに伸び、延長60mにわたって検出されましたが、西端部の検出状況を見ると、それ以上伸びることはなく、鳥の嘴状に終わっているのが判りました。規模は、堤防敷（下端幅）は9～14m、馬踏（上端幅）は2m、高さは南側は0.6m前後、北側は1.6m前後あります。構造は砂層が主体をなしており、土盛りによるものではなく、神崎川や糸田川の洪水によって形成された粗砂層をそのまま堤防の本体としています。馬踏部分は長さ1mの杭を3列に打ち込み、両端の杭には長さ3～4mの横木を組んで法肩とし、法部分についても横

木に樹枝を絡ませて法面の流失を防いでいたと考えられます。使用された材については、その7割は水に強い松材が使われています。また、その突端部分は杭、横木等による法面の保護はなされていませんが、腐食層を多く含む粘質土が法面を覆っており、これは法面保護のため意図的になされたものと判断されます。この堤防については、法面の両面に同等の法の覆いが施されていること、川中に突出するように終わっていることが注目され、神崎川と糸田川の合流点に設けられ、双方の流れを調整するための、所謂、「瀬割堤」であると考えられます。構築時期については、平安時代の前期には構築されており、平安時代を通じて機能し、鎌倉時代の前半には、その機能を停止していたと考えられますが、その時期には神崎川と糸田川との合流点が、さらに西へ移動していたことも考えられます。この堤防の構築工事のように大規模で、高度な技術が使われた土木工事は全国的にも調査例は少なく、国家的な事業によるものと考えられます。このことは、西国と京都を結ぶ水上交通路として、いかに重視されていたかということが考えられます。

五反島遺跡の調査で、河道跡や堤防が調査されたことによって、神崎川の古代の治水技術や水運を考える上で非常に大きな手懸りを得ることができました。



▲堤防の用材としては、大半は松が用いられています

文化財調査進む

1) はじめに

昭和60年度から開始しました(仮称)吹田市歴史民俗資料館建設のための文化財調査も、2年が経過し、今年度も昨年度に引き続き、市民の方々の御協力を得て、美術工芸、古建築、民俗文化財の3分野において実施しました。

また、大阪府文化財愛護推進委員により、市内の小祠の所在地、祭祀の仕方、由来等について調査が実施され、合計138点の資料を得ることができました。これらの調査は今後も開館に向けて、継続していく必要性を痛感しています。

そこで、今回はその中の美術工芸の調査について触れてみることにしました。

2) 美術工芸資料の調査の方法

美術工芸の調査は彫刻、絵画、工芸品、書跡の分野に関して実施しています。いずれの資料に関しても吹田市に関連があると思われる資料に重点を置いて実施していますが市内にどのような資料があるのか、その実態を知る事が当面の目標です。

調査の方法は採寸をした後、資料に応じたチェック項目を経て、写真撮影を行います。チェック項目とは、絵画・書跡についていえば、員数、形状(掛軸・巻物・襖・屏風・冊子等)、品質(絹本・紙本・麻本等)、顔料(墨画・淡



▲調査風景

彩・着色等)、画題、内容、作者、時代などで、彫刻の場合は、構造、形態、材質、年代、名称などとなります。工芸品についても、同様となり、これらをカード化して種々の項目によって分類していきます。こうしたカードは保存され、館の展示や研究材料として活用されていくわけです。

3) 吹田における美術工芸資料

調査はまだ2年を経過しただけで、さらに調査は継続されますが、現時点における美術工芸調査の成果について簡単に触れてみたいと思います。まず絵画ですが、仏画では、国の重要文



▲大坂画壇の作品 六歌仙図 月岡雪嶺 中西鉄藏家蔵

雪嶺は近江国日野の生まれで、初めは狩野派の画人より絵を学びましたが、後、大坂へ移住し、自ら和漢の名画を研究し、美人風俗画を得意としました。また、多くの門人を育て、月岡派の祖といわれています。

化財に指定されている護国寺の絹本着色般若菩薩像（現在、東京国立博物館寄託）が知られていますが、その他にも時代は下るものの、真宗寺院においては、開基仏、七祖、太子像といったものが多く残され、吹田における当時の信仰と歴史を考えるうえで貴重な存在です。また、仏画以外でも近世の文人画が残されています。こうした文人の中には吹田を訪れた人々も少な



▲木造黒六字尊立像(十一面観音立像)
鎌倉初期(円照寺)

右足をあげ、左足一本で立つ姿勢の黒六字尊は全国的にも作例が少なく、彫刻としては特に珍しいものです。



▲雅楽太鼓 江戸初期(紫雲寺)

胴部は極彩色の竜と雲。張付周縁部は波形。打面部は金箔白地に黒彩の三巴、周縁は極彩色の刺菱と珍しく、貴重な工芸品である。村の人々が雅楽に用いていたという伝承がある。

くないようです。代表者としては、田能村竹田、田能村直入、田中柏陰等があげられ、吹田には、これらの人々に活動する場を提供し、支持した後援者がいたことも見のがすわけにはいきません。また、吹田に移り住み、活動を続け、吹田雪操と異名をとった金子雪操も忘れてはならない存在です。さらには、森狙仙、上田公長、橘保春、長山孔寅、福原五岳、中井藍江、月岡雪鼎等と近世大坂を代表し、大坂を中心に活躍した画家の名前も見出されます。これらの作品については、大坂の近郊地域において伝来された作品であるだけに、江戸後期の近世大坂画壇を考えるうえで貴重といえます。大坂画壇とは近世の大坂で発展し、流派を超えてお互い個人的に交流をし、その結果、様々な流派を取り入れた個人様式の描写法を用いて、説明的なものや趣を

重んじるよりも、目の前のその場の事に強く関心を持つ傾向があるといわれています。さらには、このような人々の系譜を受け継ぐ後継者が、その後も吹田を中心に活躍していたこともわかってきました。今後の調査の進展によって、新資料の発見が期待されます。

彫刻においては、寺院の仏像を中心に調査を進めていますが、元来、吹田には中世の戦乱期に戦火に巻きこまれたため、それ以前の資料は密教系寺院の一部を除いては存在しないと思われてきました。しかし、今回の調査では、平安・鎌倉期の作品が残っていることが判明してきま

した。このような作品は、今後調査を継続することにより、増えていくことはまちがいないと思われま

す。吹田には、その他にも、郷土吹田の歴史を通してみた場合、郷土との関連は多くはないが、美術的に価値が高いと考えられる資料が多くありますし、逆に、美術的にはそれ程高く位置づけられなくとも、郷土と密接な関係を持ち、郷土の歴史を語るうえで貴重なものも多いといえるでしょう。美術工芸資料は、この両方の視点から調査を進め、郷土の歴史に光を当てていくことが必要と思われま

(仮称) 吹田市歴史民俗資料館建設準備委員会発足

資料館建設も開館に向けて着々と準備が進められ、そのひとつとして昭和61年度は資料館建設準備委員会が発足しました。この委員会は市民団体等の代表者、学校教育関係者、学識経験者と広く意見を聞きながら資料館建設準備を進めていくために設置され、今回、12名の方々に委嘱しました。

今年度は4回の会議を開催し、館の規模、構造、動線計画、展示内容、運営等の基本的な計画に関して話し合いがなされ、市民各自が使いやすく、親しみの持てる、より充実した施設となるべく要望がでました。

建設準備委員会の委員は、次の通りです。

委員長	網干善教	関西大学教授
副委員長	池田半兵衛	吹田郷土史研究会会長
委員	山中一郎	京都大学助教授
	脇田 修	大阪大学教授
	小山仁示	関西大学教授
	上井久義	関西大学教授
	青山賢信	大阪工業大学教授
	西村公朝	東京芸術大学名誉教授
	太田孝彦	帝塚山学院大学助教授
	片岡 徹	古江台中学校教諭
	石床芳昭	桃山台小学校教頭
	角田悦三	府文化財愛護推進委員
		吹田市協議会副会長

建設準備委員会審議日程

第1回 昭和61年7月31日

- ①資料館建設計画の経過・計画概要の説明
- ②館の構造・活用について

第2回 昭和61年9月24日

- ①平面図・近世民家移築用地と移築例の説明
- ②館の構造・活用について
- ③博物館法との関わりについて

第3回 昭和61年11月17日

- ①館の運用について
- ②学校教育の利用について

第4回 昭和62年3月27日

- ①基本構想について



▲準備委員会風景

寄贈民具一覽表

(昭和62年3月31日現在)

寄贈年月日	寄贈者(敬称略)	寄 贈 品 名	(数量)
59. 5. 26	岡 本 勉	備中鍬、馬鍬など農具、長持、石臼他	計23点
60. 2. 21	尾 高 栄太郎	土臼、鍬など農具	計6点
60. 9. 9 61. 4. 12	村 田 稔	ふご、雁爪	計2点
61. 3. 20	森 川 喜一郎	平鉄など桶屋道具	計4点
61. 3. 20 61. 10. 30	吉 野 政 一	銚、ふいごなど鍛冶屋道具	計8点
61. 3. 22	森 川 久 男	平鉄、ふんまわしなど桶屋道具 他	計13点
61. 3. 30	奥 保 肇	河内紺木綿布、パッチ、膳他	計5点
61. 5. 22 61. 11. 21	稲 浦 重 男	ビシャン、ノミなど石屋道具 他	計48点
61. 5. 23	上 田 温 夫	鋤、いかきなど農具、あんどん 他	計24点
61. 5. 23	武 内 茂 子	丸瓦切り型、けん型など瓦製造道具	計45点
61. 6. 28	田 中 真 一	鉋、ちょんな、縦引きなど堅木屋道具	計48点
61. 9. 19 61. 11. 25	由 上 武 重	箆筥、機織り機、糸巻車、万石とおし他	計39点
61. 10. 6	村 上 九三子 豊子	袷着物、袴など衣類、椀、膳など食器類	計21点
61. 10. 15	天 野 英 夫	もっこ、掘り棒など農具、管笠、糞 他	計37点
61. 11. 21 62. 3. 30	若 村 正 博	伸子、そろばん、ちぎ、つちのこ 他	計5点
61. 11. 25	古 谷 玲 子	鍛冶屋、仕事始め製作品	計1点
62. 1. 16	金田町自治会	こし	計1点
62. 2. 4	下 野 隆 男	龍吐水、水車、糸巻車 他	計14点
62. 2. 4	山 口 正 文	鍬、鋤	計2点
62. 3. 25	山 下 省 三	オルガン	計1点

御協力ありがとうございました。